

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：41304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730646

研究課題名(和文)遊びを通じた幼児教育の実践に関する研究

研究課題名(英文)A Survey on Early Childhood Education through Playing at Nursery Schools

研究代表者

飯島 典子(IIJIMA, Noriko)

聖和学園短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：40581351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校教育へと接続する幼児教育のあり方を検討することを目的としていた。質問紙調査から、多くの保育者は読みや計数を幼児期からできるようになることを重視していた。しかし、幼児が文字や数に興味を持つような教室を構成している一方で、文字や数を使う遊びはあまり行われていなかった。幼児教育の実践から、保育者は保育所における教育は小学校における教育とは異なるという認識をもっているが、保育所で行う学習となると小学校における学びに近くなっていた。保育コンサルテーションを通じて、幼児の学びの意欲を高めることのできる遊びを保育者が考案できるようになり、幼児期に相応しい教育がみられた。

研究成果の概要(英文)：We aim to develop a better method to combine the early childhood education at nursery schools with the education at elementary schools. Our survey shows that most nursery school teachers realize the importance of the children's abilities to read letters and count in their early stage. Some classrooms are designed to interest children in letters and numbers, but they provide not much opportunity for children to play with letters and numbers. The survey also shows that the activities at most nursery schools are much the same as the ones at elementary schools, although many nursery school teachers understand the differences between education at nursery schools and education at elementary schools. An interesting case is reported where our advice helped nursery school teachers on their own develop a game effective in motivating children to learn.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：幼児教育・保育

キーワード：幼児教育 保育所 遊び 保育計画

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、我が国において幼児期における教育と小学校以降の教育との連携推進が課題とされている。文部科学省と厚生労働省(2009)は保育所や幼稚園等で行われている幼児期の教育は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものであり、幼児期の発達の特性に照らして幼児の自発的な活動としての遊びを重要な学習として位置づけ、保育課程や教育課程を編成し、教師や保育士が意図的・計画的な指導を、環境を通して行うよう推進している。実際に、幼稚園における調査では数量の理解などはそれを直接的な指導の目的とした活動はほとんど行われず、集団活動の全般にわたって行われていることが多い。しかし、保育者が遊びに埋め込まれた学習経験を理解し、遊びや活動を発達の視点から計画的に行うことにはつながっていないのが現状である。とりわけ保育所においては保育課程の編成が平成20年の保育所保育指針の改定によってはじめて明示化されたため、その内容は開発途上にあり、保育所の特性を活かした保育計画の検討が必要であると考えられた。

(2) 保育所において保育者はこれまでも子どもたちが楽しいと感じる遊びを工夫してきた。しかしながら、その遊びに知的要素を意識的に取り入れた工夫があまりなされていない。その背景には、保育者にとって遊びに発達の視点を取り込むことがわかりにくい点にあると思われた。すなわち、どのような力を伸ばそうとしているのかについて指導計画に明確に記載することがあまりないため、意識して教育を展開することが少ないと考えられた。さらに、それらの取り組みは体系化されていないため、どのような遊びが小学校での発達と学びに連続的につながる遊びとなるのかが明確にならないと思われた。したがって、遊びを通じた幼児教育のあり方を考察する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は保育計画に基づいた遊びを通じた幼児教育の実践から、小学校への発達と学びへと連続する幼児教育のあり方を検討するものである。幼児の数や文字の認識に関する研究が進み、1年生の学習の基礎知識は幼児期に獲得されることが明らかになり、幼児教育の重要性が指摘されている。その方法について保育所保育指針「保育の方法」では、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育することとしている。しかしながら、遊びは活動そのものが目的となるものであるため、その本質を失えば遊びではなくなってしまう特徴があり、保育者が「遊びを通じて学ぶ」ことを実践する際の難しさに繋がっていると考えられる。そこで本研究では、①保育者の幼児教育についての認識(就学準備の必要性およ

び、環境構成の状況)と、②幼児の発達に合った幼児教育の実践(年間指導計画の立案と活動実施)を通じて、保育所における幼児教育の現状を整理し、小学校への発達と学びの連続性を保障する幼児教育のあり方について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

研究1 保育者と保護者の幼児教育についての認識：就学準備に関する意識調査

(1) 調査時期

2012年10月。

(2) 対象

①保育者：S市のA保育園およびB保育園の保育士57名(男性4名、女性53名)。保育者の平均保育歴は6.8年であった(幼稚園経験も含む)。

②保護者：保育者調査を行ったA保育園およびB保育園の3歳児クラス、4歳児クラス、4・5歳児クラスに在籍する児童のべ183世帯の保護者に調査を依頼し、91世帯から回答を得た(回収率50%)。このうち大きな不備のない88名(調査時の子どもの年齢は3歳14名、4歳36名、5歳20名、6歳18名、男児48名、女児40名)のデータを用いて分析を行った。

(3) 質問紙の構成

①保育者の基本情報(保育者のみ)

担当しているクラスや役割、保育歴(保育園、幼稚園それぞれ)について記入を求めた。

②保護者の基本情報(保護者のみ)

家族構成、子どもの保育歴について記入を求めた。

③「小学校に入学するまでに身につけておくとよいこと」(保護者、保育者共通)

質問紙は<文字の読み><文字の書き><数詞><計数・計算><時・曜日・日><遊び(言葉や数を使ったもの)><話すこと・聞くこと><興味関心・積極性><社会性>の9領域各4項目(合計36項目)で構成されていた。保護者および保育者はこれらの項目について小学校に入るまでにどの程度必要だと思うかについて「必要ない」(1)～「たいへん必要」(5)の5段階で評定が求められた。また、3歳以上児クラスの担任については、同じ36項目について日頃、取り入れているかを「全くあてはまらない」(1)から「とてもあてはまる」(5)の5段階で評定を求めた。

研究2 幼児教育に関わる環境構成の現状

(1) 調査期間

2013年8月～2013年10月。

(2) 調査対象

S市内の10箇所の保育所において、3歳児クラス(14)、4歳児クラス(3・4歳児クラスを含む)(15)、5歳児クラス(4・5歳児ク

ラスを含む) (17)、合計 36 クラスを担当する保育士 46 名 (男性保育士 8 名、女性保育士 38 名) を対象に行った。

なお、複数担任は、単純な母集団担当と障害児担当という役割分担ではなく、メインとサブをローテーションで行い、いずれの保育士も母集団担当の役割を果たしていることが多かった。そこで本研究では、クラスを担当する保育士全てを対象とし、それぞれの評定を分析対象とした。

(3) 質問紙の構成

Harms et al(1998) の保育環境評価スケール幼児版 (ECERS) などを参考に、保育士が担当するクラスの環境を自己評価できるよう質問紙を作成した。ECERS では「空間と家具」「個人的な日常のケア」「言語-推理」「活動」「相関係」「保育環境」「保護者と保育者」について全 43 領域の項目で構成されている。この内、本研究では、クラスの環境構成に関わる事項のみを参考にした。本質問紙では、<数の概念> (計数や書かれた数に親しむなどに関する項目 6 項目)、<言語活動> (問題解決に関する活動などに関する項目 6 項目) など全 8 領域、合計 48 項目で構成することとした。これらの項目について保育士に対し、現在のクラス環境として「あてはまらない」(1) ~ 「大変あてはまる」(5) の 5 段階で評定を求めた。

研究 3 幼児の発達に応じた幼児教育の実践

(1) 調査期間と対象クラス

①第一期

2012 年 9 月~2013 年 3 月。3 歳児クラス、4 歳児クラス、5 歳児クラス。

②第二期

2013 年 4 月~2014 年 3 月。3・4 歳児クラス、4・5 歳児クラス。

(2) 調査方法

遊びを通じた幼児教育の実践は、文字と数に関する長期的目標と短期的目標を立て、それを達成するための年間指導計画と調査日の遊びの日案を作成して行った。

そして、隔月で遊びを録画記録した。その記録はカンファレンス資料とし、記録をもとに遊びの課題を明らかにし、知的要素の取り入れ方をより意識的にすることを繰り返した。

4. 研究成果

研究 1 保育者と保護者の幼児教育についての認識：就学準備に関する意識調査

(1) 領域における特徴

「文字の読み」「文字の書き」「数詞(数字)」「計数・計算」といった教科学習に関わる領域における保護者と保育者の得点に有意な差が認められ、保育者よりも保護者の方が必

要だと考えていた。しかし、保育者の平均得点はいずれも 3.0 以上であることから、必要だと感じている中での差であるといえる。

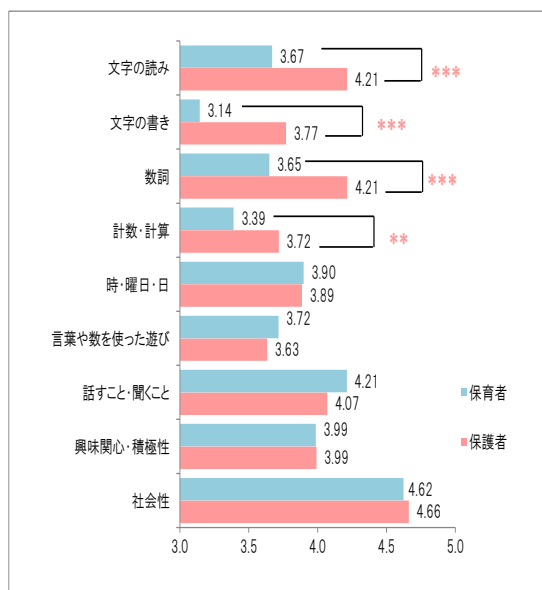


図 1 小学校への学習準備に対する保護者と保育者の認識

一方、「社会性」は保育者、保護者がともに最も大切だと考えていた。そして、「話すこと・聞くこと」には有意差はみとめられなかった。しかし、保護者よりも保育者の方が小学校に入学するまでに身につけておく必要があると考えているようだった。また、保護者のこのような傾向は 3 歳~6 歳のいずれの子どもの保護者もほぼ類似している傾向があり、3 歳の子どもの保護者であっても教科学習に関連する力を身につける必要があるという考えは高かった。

(2) 項目による違い

保護者と保育者それぞれの項目ごとの得点から、保護者は文字の読みや数を数えることなど教科学習の基礎となる力を重視しており、遊びや興味関心を広げるようなことの得点は低かった。一方、保育者は社会性や、聞くこと・話すことに関する項目の得点が高く、文字の読みなどの得点は低かった。このような結果となった背景は、保護者も保育者も文字を読めるようになることや、数を数えるといったことは勉強という独立した学習として認識している傾向にあるからだと思われた。

さらに、保育者の「神経衰弱などトランプ遊びをする」「興味のあることを凶鑑で調べる」といった得点は低く、遊びを通じた文字や数の教育は十分にはなされていないのではないかと思われた。

研究 2 幼児教育に関わる環境構成の現状

(1) クラスによる環境の特徴

保育者の評価点は<数の概念><自然科学>において 3 歳児クラスの評価点と、4 歳

児・5歳児クラスの評価点に1%水準の有意差がみとめられた。これは、4歳は音韻理解や10を超えた数を扱えるようになる時期であることから、保育者は発達に応じた環境を整えていると考えられた。

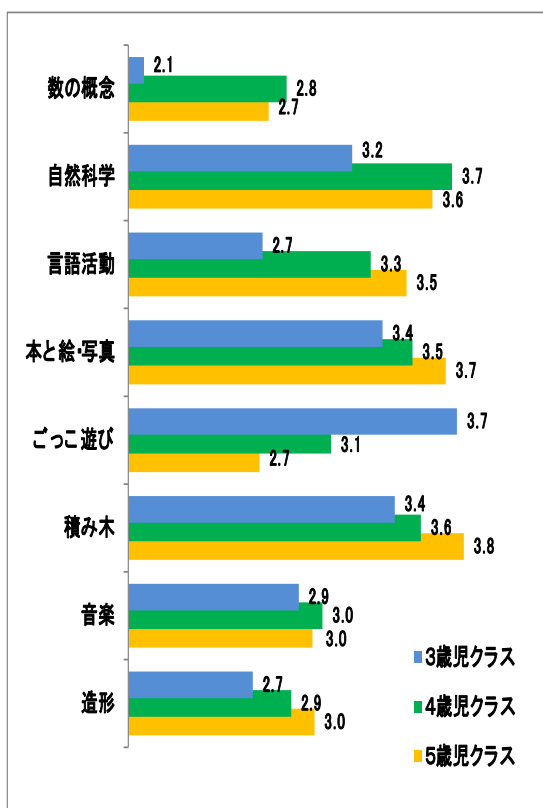


図2 クラスごとの環境構成の状況

(2) 項目の得点からみた年齢による環境の違い

3歳児クラスに比べ5歳児クラスにおいて得点に差が生じていたのは、<言語活動>では、「子どもが推理力を用いる遊びをしているときに、保育者は理論的な関係について話し子どもの理解を促している」「問題解決をするようなさまざまな活動を頻繁に行っている」であった。これらの項目の特徴から、保育者は、言葉を通じた理解を促すように幼児を援助するだけでなく、そういった力を必要とする保育を行うようになることがわかる。また、<数の概念>では、「毎日の活動のなかで算数や数を学ぶことができるよう働きかけている」など、数を用いた活動を実施し、それを通じて算数(計数・計算)を学ぶことができるようにしていることがわかる。また、<自然科学>では、「本、写真などの視覚教材を用いて子どもの直接体験を発展させるような知識を与えるような話しかけをしている」といったように、5歳児クラスでは、自然科学の体験をさせるだけでなくその経験の意味を言葉や絵などから深く理解できるように促していると考えられた。

一方で、5歳児クラスと3歳児クラスとの得点の差が大きい項目には、5歳児クラスの

得点であってもそれほど高くはない項目もあった。それは、<算数>の「算数や数を意識した活動を頻繁に行っている」(5歳児で2.8)、「1日の相当の時間、子どもは数の教材を自発的に取り出して遊べるような環境になっている」(5歳児で2.4)の2項目であった。ここから、数の概念理解を促す活動や、幼児が自発的に計数や計算を楽しむような玩具をクラスに用意するといった環境構成は、あまりなされていないことがわかった。ここから、保育者はごっこ遊びなど通常の保育の中に組み込まれ、毎日のように活用あるいは実施するものについて環境を整える傾向にあるが、それらをさらに発展させるような素材や、文字や数、自然科学の理解を促すための環境を整備する試みはあまりみられないことが分かった。

以上のことから、保育者は発達に応じた保育の必要性を認識しつつも、数や文字についての物的環境や活動は十分になされていない傾向にあることが分かった。そこで、幼児期に相応しい教育としての環境構成のあり方や、遊び、活動内容としてどのようなものがあるのか、保育現場に提案する必要があると思われた。

研究3 幼児の発達に応じた幼児教育の実践

1. 調査期間中に実施した活動と変化

調査期間中に立案した活動は年中児クラス、年長児クラスそれぞれ9回であった。

(1) 年中児の活動の変化

表1には年中児(4歳児クラス、3・4歳児クラス)で調査期間中に録画した活動がまとめられている。

年中児では音韻理解が発達し文字への関心が高まる特徴がある。しかし、保育所の特色である異年齢混合クラス、編成および障害児への配慮を踏まえると、発達差を配慮する必要がある。そこで、文字よりも数を中心に活動を展開することとなった。

表1 年中児で実施した活動

4歳児、3・4歳児クラス	
2012年度	サイコロゲーム(数)
	大仏ゲーム(数)
	猛獣狩り(数)
2013年度	ダンゴムシ(自然)
	色水ジュース(数・自然)
	多いぶどうは?(数)
	どんぐりを数えよう(数)
	冬の自然探し(自然)
	お手紙づくり(文字)

2012年度の調査開始時は「サイコロゲーム」では、サイコロの目が1～3のみのサイコロをオリジナルに作成し、サイコロの目の数だけボールを運ぶ遊びを考案した。サイコロの目が1～3までであったのは、これまで調査対象保育所が数を意識した活動を行ってこなかったため、経験値の低い子どもを考慮し誰でも理解できる数に限定したからであった。しかし、実際の子どもの力よりも低い設定の遊びを展開していた。

そこで、カンファレンスにおいて、年中児であれば10を超える数を理解できるようになっていること、簡単な足し算ができる子どもも多くいることを伝えたところ、「猛獣狩り」(動物の名前の数で集まる集合ゲーム)では、2つの動物の名前をあげ足し算するといった複雑なゲームへと発展できるようになった。

また2013年度では園に実ったブドウの房を収穫しブドウの数をグループで数えたり、どんぐりを箱の中から取り出し何個あったのかを数え、誰が一番多く取ることができたかを競うゲームを保育者が展開するようになった。

その際には、ペットボトルのキャップで作成したボードを利用し、どの発達状態の子どもも同じように大きい数の計数、集合数、数詞を理解できるような教材を考えることができるようになった(図3)

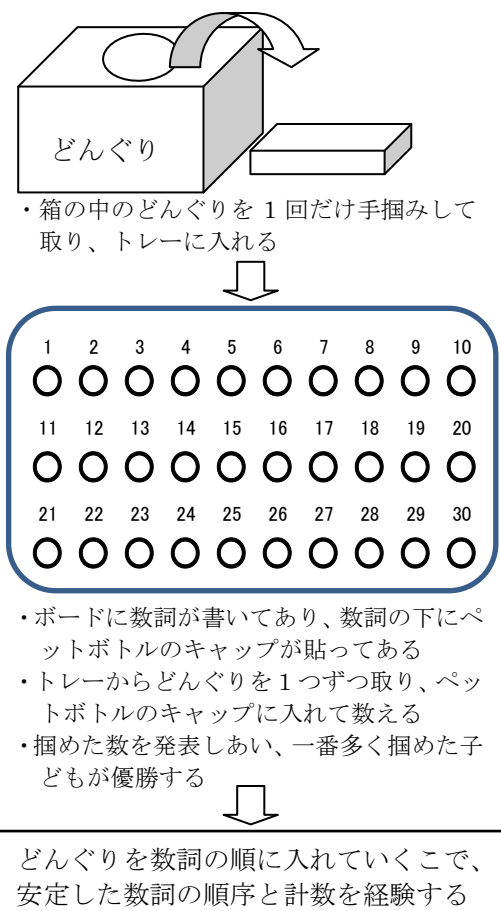


図3 どんぐりゲームのルール

数の概念を獲得するためには、安定した数詞の順序(数字を正しい順番で覚えている)、1対1対応(1つの物に1つの数詞をあてることができる)、集合数(最後に唱えた数が全体の数を表す)の3つを正しく理解する方が必要となる。この図3のペットボトルキャップに入れながら数を数える経験は、これら3つの要素が全て備わっている。また、その場に保育者が入り子どもが数えている姿を観察することで、子ども一人ひとりの数の概念に関する発達状態を把握することができ、援助の計画を立てることができた。

(2) 年長児の活動の変化

表2には年長児(5歳児、4・5歳児クラス)で調査期間中に録画した活動がまとめられている。年長児は小学校へ向けての準備期間であることから、言葉と数の両方を意識した活動を考案することとなった。さらに、集中して話を聞くことや、ルールを守るといった社会性も就学に向けて必要な事項である。そこで、ルール遊びを展開することで、知的な側面と社会性の側面の両方の発達を促すことを長期的な目標とし活動を考案することとなった。

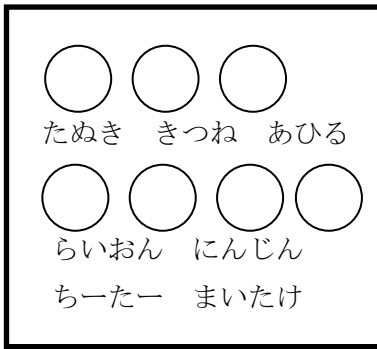
表2 年長児で実施した活動

	5歳児、4・5歳児クラス
2012年度	言葉づくり(言葉)
	絵本(お話)作り(言葉)
	ころがしドッチ(数)
2013年度	買い物ゲーム(数)
	大漁ゲーム(ルール・数)
	オセロゲーム(ルール・数)
	どんじゃんけん(ルール・数)
	言葉づくりゲーム(言葉・数)
	いつ・どこで・だれが・なにをしたゲーム(言葉)

2012年度の調査開始時期は、これまで調査園において意識的に文字や数を進めてこなかった状況であった。そのため、文字と数を用いた活動を考案するとなると、文字や数にのみ活動が焦点化され、楽しいと感じる遊びの本質を失ってしまった(図4)。

そこで、カンファレンスにおいて、遊びの本質である楽しみを追及すること、子どもが自ら繰り返し遊べるような遊びを考案するよう助言した。

2013年度になると、どうしたら子どもは楽しいと感じるのかを中心に活動を考案できるようになった(図5)。そして、季節や行事を踏まえて活動を考案するようになった。また、子どもも自由遊びの時間に自発的に遊びを繰り返すようになった。



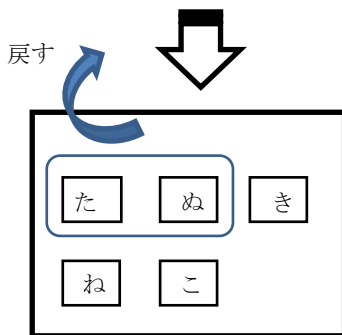
ホワイトボードに「3文字の言葉を考えて発表する」というお題を出し、考えた子が手を挙げて発表する活動。文字数が多くなることで難易度が上がる。
活動に参加する子とそうでない子に分かれてしまった。

図4 言葉づくり

3つとる	2つとる	2つもどす
------	------	-------

ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
り	ゆ	み	ひ	に	ち	し	き	い
る	よ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
れ	わ	め	へ	ね	て	せ	け	え
ろ	ん	も	ほ	の	と	そ	こ	お

- サイコロを振り、出た数だけコマを進める
- マスに書かれた数の文字を取る／戻す。このとき言葉を作ること意識する



- 言葉をたくさんつくったチームの勝ち
- 「2こもどす」で、言葉を多く残すために、言葉を構成する文字を分解する必要がある。そのため、文字をまとめたり、崩したりと言語の構成に気づく経験ができる
- 全員が楽しみながら参加できた

図5 言葉づくりすごろくゲームのルール

また、保育者は自主性を引き出すような保育環境の工夫をするようになった。それと同時に、物的環境を魅力的に活用することができるようになった(図7)。



棚の上には保育者が道端で摘んできた草花が置いてあり、草花ごとに先生が考えたクイズが書いてある。そのクイズに答えるために、横にある本棚には答えの記載されている図鑑が用意されていた。クイズは毎週変わるため、繰り返し子どもが自発的に調べることでできる環境が構成されていた。

図7 先生からのクイズ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- ① 飯島典子・中島恵. (2013). 保育所における幼児の発達を促す保育環境—クラス環境についての保育士の認識に関する予備調査—. 聖和学園短期大学紀要, 51, 21-32. 査読有

〔学会発表〕(計 4 件)

- ① 飯島典子. (2013). 保育園における幼児教育の実践に関する研究 1—保護者と保育者への学習準備に関する質問紙調査—. 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 403.
- ② 飯島典子. (2013). 保育園における幼児教育の実践. 全国保育士養成協議会第 52 回研究大会研究発表論文集, 570.
- ③ 飯島典子・中島恵. (2013). 環境を通じた幼児教育の実践に関する研究 1—3 歳以上児の発達に応じた保育環境に関する質問紙調査—. 日本乳幼児教育学会第 23 回大会研究発表論文集, 92-93.
- ④ 飯島典子. (2014). 保育所における環境を通じた保育の実践—3 歳以上児クラスにおける保育環境の年齢比較—. 日本発達心理学会第 25 回大会発表論文集, 250.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯島 典子 (IIJIMA, Noriko)

聖和学園短期大学・保育福祉学科保育専攻・准教授

研究者番号：40581351